

できることは自分たちで

長野県栄村、独自に「道直し」

国や都道府県に頼りすぎず、できることは自分たちでやる。そんなモットーを貫いてきた村がある。住民が行政や企業を巻き込み、まちづくりを主導する例もある。「自治」を地で行く活動がくらしを支え、地域を元気にしている。

長野県の北端、山あい位置する栄村は、人口2千人ほどだ。「日本百名山」の一つ、苗場山があり、国内有数の豪雪地帯としても知られている。

もう一つ、この村を有名にしたのは、周辺自治体との合併を選ばず、自立を模索してきたことだった。住民と協力しながら棚田を改良する「田直し」や、道を

広げる「道直し」などの独自事業に取り組んできた。

稲わらを編んで作る工芸品「猫つぐら」の名人、藤木金寿さん(88)の家は、「道直し」で拡張された道路の前にある。妻みちさん(85)は「昔は雪が積もると、かんじきをはいて踏み固めるしかなかった。できた道が斜めになってしまっ

て歩くのも大変でした。道を広くしてもらって何よりです」と話す。

近年の猫つぐらも相まって、猫つぐらを作りたいという人も増えている。中には手順を教わろうと家まで出かけてくる人もいる。そういう人にも、車で来てもらえるようになった。

パークゴルフ場手作り 北海道旭川市

ゴルフデンウィークを前にした4月28日、北海道旭川市の「西神楽」と川パークゴルフ場」で、今シーズンの開場式があった。

大雪山系を望む美瑛川の河畔に36ホールを備える。国際規格を満たしたパークゴルフ場だ。昨年、台風災害で水没したが、半分の18ホールが復旧。今シーズンも18ホールでスタートする

が、残り半分も芝生の養生が終わり次第、再開できる見通しだ。「なんとか元に戻したいという気込みみでやってきた。オープンできてほっとしています」。運営管理委員会の寺田哲雄会長(80)は感慨深げだ。

コースは、地元の西神楽地区の住民が手作りの。市に開設を要望したところ

村産業建設課の藤木利章係長によると、「道直し」の対象になるのは軽トラックがやっと通れるような幅2.5メートルの道。これを3.5メートル以上に広げる。「そうすれば除雪車が入れるようになる。ということは、冬でも救急車や消防車が入れるようになるのです」。どの道を広げるかは、集落からの要望を受けて決める。

今年度も3路線、約300坪を広げる計画だ。福祉分野では、「げたばきヘルパー」事業に取り組んできた。尾根や谷に隔てられて31の集落が点在する同村では、高齢者介護のヘルパーが家を訪問するの

も大変だ。そこで、隣所で助け合えるようにしようと考えた。住民向けのヘルパー養成講座を開き、現在81人が登録している。

ただ、事業を担当する村社会福祉協議会の広瀬義昭さんによると、実際に訪問介護に従事しているのは10人ほど。「人手が足りず、げたばきどころか車で走り回っています」

広瀬さんが考えているのは、今後はデイサービスも充実させることだ。村内に拠点をいくつか設け、送迎を充実させる。「げたばきヘルパー」と一体的に運用する検討を始めたところという。

ろ、2億円の予算確保が難しいことなどを理由に断られた。「ならば自分たちで」と動き出したのだ。河川管理者の北海道開発局から「社会実験」で河川敷を利用することへの同意を取り付けた。住民総出で開墾し、造成会社の技術協力も受けた。市の支援も得て2003年に開場した。

管理運営は住民団体「NPO法人グラウンドワーク西神楽」が担う。「グラウンドワーク」はイギリス発の活動で、住民と行政機関、企業の3者が、パートナーとして認め合うことを理念とする。「私たちは『行政参加型』と言っています」と話す。(吉沢龍彦)

意見や情報をお寄せください。ファクスは(03)55565086、メールはtanuku-japan@sasahi.com。



「道直し」で整備された道路。除雪車が入れるようになった。長野県栄村



住民たちが整備したパークゴルフ場。北海道旭川市